こんにちは
日本共産党です

日本共産党流山市議団
いぬい紳一郎　7159-2773
小田桐たかし　7154-0878
徳増　記代子　7148-6871
植田　和子　7154-0288
市議団事務所
TEL/FAX　7157-6140

【震災ボランティアの活動】

3日19時　東葛病院集合･出発※
4日 0時30分相馬市中央公民館に到着
1時　屋根付きの廊下で野外泊
5時　起床後、持参したカップメン･ご飯等で朝食
8時20分党支援センター到着
9時30分南相馬市立中村第2中学校で焼きそばの炊出し
13時30分焼きそばで昼食後、移動
15時　相馬市松川浦地区の住民要望聞き取り作業
17時30分終了・支援センター到着後、お風呂（銭湯有、1回500円）･夕食（コンビニや牛丼松屋も営業中）
20時　活動交流会･反省会
21時30分就寝
5日 6時30分起床後、食事。持参したご飯等で昼食を作成
7時　センターの清掃後、泥掻きボランティア作業と救援物資届け隊に分かれ活動開始
12時30分集合後、昼食
19時頃東葛病院到着･解散
※ルート:流山IC～常磐道～外環道～東北道～福島西IC～相馬市役所へ

日本共産党震災ボランティア隊

相馬･南相馬市で活動

日本共産党流山市委員会･市議団は、５月18～20日宮城県石巻市に続き、６月３～５日に福島県相馬市･南相馬市へ震災ボランティアに行きました。今回はその報告をします。

初めてという方も…

参加者のほとんどが初めてというなか、震災ボランティアに11人が市内から参加しました。「流山市内から10名以上のボランティア隊が相馬市へ参加したのは初めて」（市ボランティアセンター）というなか、32～81才、女性も参加した老若男女。多くが初対面ですが、声を掛け合い、ケガをせず、力いっぱい活動し、３日間頑張りました。

「被害の大きさに言葉が出ない」

現地では、交差点を曲がれば…、一本道路を入れば…これまでの風景が一変します。あまりにも巨大な津波の被害に、参加した多くが言葉を失います。

南相馬市の80代男性は「避難といっても、何処にいけば安全なのか示してくれない。子どもが住めない地域になるなんて悔しい」と話していました。

「避難所生活も3ヶ月。もう限界」

２日目、炊出し（焼きそば）をした南相馬市中村第２中学校では、１５０名もの方が避難を続けています。子どもはわずか数人。多くが高齢者で、ストレスなどで体調を壊す方も出ています。

ボランティアの方も含め１８０人分を作成。途中そばが足りなくなるなどのハプニングもありましたが、京都府や福島市内のボランティア隊と力を集め、避難者全員に『そばも野菜も同じ量』とこだわり、最後まで完成させました（避難生活が続く中で、些細なこじれあいをつくったり、不満を残さないため）。

私たち以外に、都内の建築会社は、仕事で余った木材を再利用し、木製の仕切り版を届けていました。また埼玉県越谷の事業者（㈱バドシーン）は映画上映のボランティアをされ、「今回で80回目。これから仙台、石巻へ行くんです」「流山と聞いて」とあいさつを交わし、エール交換。みんな初対面ですが、『救援・復興、心ひとつに』を実感します。

炊出し後、共産党の荒木南相馬市議と一緒に避難されている方へ挨拶。千葉県流山市からきましたというと、みなさんが驚かれ、感謝の声が聞かれました。しかし荒木市議は「炊出しでは食事が固定される。自分が食べたいものを、自分の味付けで、食べられる量を、自分でつくれない日々が３ヶ月続くんですから、深刻です。ストレスも体調管理も限界でしょう」「政治の役割を実感します」と話されていました。

『営業再開も地獄、閉店も地獄…』

４日目の午後は、相馬市内の観光スポットのひとつ松川浦地区で、被災された住民への要望聞き取りを行いました。

80代のご夫婦は「市の一級建築技師から『倒壊する恐れがあり、住むのは危険』と言われても自宅で住むしかない。持病のぜん息があり、避難所の環境では死んでしまう」と話されます。

その他にも、「13代続く海苔養殖もダメ。年収６００万円もなくなり、夫婦の年金だけ。家の修理もできない」「銀行も郵便局もなくなり、引き出しができない」「電話回線が不通なので心配」といった声が寄せられ、お米や水がほしいといった要望には、翌日、流山市から持っていった救援物資を手渡しました。

松川浦地区で４月16日から唯一営業を再開した旅館亀屋（相馬塩浜字船越１２９ ☎０２４４（３８）８１５３ ※詳しくはお問い合わせください）さんでは、津波のＤＶＤを見せていただき、「みんな、営業再開も、閉店も地獄。進んでも借金、このままでも借金。『二重ローン』問題は、政府の３年猶予ではダメ。最低10年は必要」「火力発電所の修理・再開で５年。観光客が６年目からこられるよう、地域でがんばりますよ」と話されていました。

相馬市民と足並みそろえ、あらゆる復興支援を

相馬市内では毎週土日、はらがま朝市が開設。救援物資の配布したり、屋台も出店しています。広島県内のパン会社はトラック２台で駆けつけ暖かいパンを提供。屋台（この日は８店舗。こうなご天丼１００円、たらのフライ３切れ３００円などがありました）は相馬市民とボランティアが奮闘し、売上全額を寄付しています。

被災地内外が自発的に支えあっている時に、流山市が「相馬から要請がない」からボランティア派遣をやらないという姿勢でいいのでしょうか。

市民任せは限界があります。相馬市内で再開した旅館やホテルを拠点に、お祭りへの参加（全て自前が原則）やボランティア（６月４日時点９千人）を募るなど、あらゆる復興支援に立ち上がるべきではないでしょうか。